和訓栞

也之部

三十

837
34
48

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用

837-48

国立国会図書館蔵書

也の部

洞津　谷川士清　纂

根岸信蔚氏寄贈

昭和八年

屋（いや）の字也重ねるといふ舎屋も意同〳〵神代紀ま宇（う）
つまつくりとよめるう宇ま藁屋葺屋檜皮（ハダ）屋檜皮（ヒワダ）屋
濱屋杉屋伏屋瓦屋廻屋なとよめり神賀詞ま天の甦和くなるもみ
うやしみて皷屋の字也方架集ま率和と出ているもとよめり神武
紀の怡奘（イサク）過ま亦同〳〵〇矢ま射殺しれの音より名くる成へし又羽の軽
語まも天子の矢雉羽あるをとて当人好るといふ筑前脳肯の箭ま令
義解まま少〇蝦夷の矢ハ三人もうの矢ハ十
三束三伏あとらふ束ハ握をつゝよむもわく一把りをいふ〇矢ま義貝
と日本紀まえ三代格まハ十隻と一具ふ〳〵兵庫式ハ五十隻と一具ふ〳〵也
ま〇木ま割ま其難さハ柯ま斧をりて其木口ま殴ま椓ま矢といつ
古事記ま切伏大樹架矢打立其木ハえそふ是也〇輻をよむも和名抄

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

よまゆ　夜まゆ　名義抄　〇よひかくる色ましてよそ霊異記　咄とよみ
また名伊勢物語　昔とよめり又詞のたすけよ多くらひおもふ詞まよ
しの数の辞也神代紀よ歟をよめり耶也と同し音
まあしよ字音ことを守い語之餘也哉い語辞くしつ又哉を嘆詞と注也
意よえとよめれや当なりまやまれやの歟也何をやまれや同し又諸を
よめり或いやいとまりてやいの云もいのるもいのり消をいのりともをとえまりや
又光のうつもも萩やわとうの歟也唯やいうよう綾也い疑よ詞のよ何りや
い疑よ詞のよ何りまやうとをやまれや迷ま歟やうへ記をやまうへうの歟也又も
やうとみら雪や氷をいふ花とうりみち雪と氷うの云也又かつへをやう
天のみうへ　〇それいうそれ山大王やいの云もいのるもいのり消をいのりともをとえまりや
よむいをよとかうあみへのや縫也といつるも唯迷紅の後のみちるいふ
て非ずや也やい發語辞と注せ　〇漢字の義よ相似うう和語の義とれの
つへ歩合うの〜　〇八をよむい八十路八百重八千代の歟やつの略也　〇日本
紀よ文をよめりいやの略也　〇弥いうやの略也　〇谷いやつの略也　〇谷沢

谷ざわ　〇裏也斜　谷の時よやとよへ音の如くらつい地を　〇古昏よ陽揚養
等の字をやの假名よ用う
へやあ　日本紀よ吐嗟とよめり發語の辞あいやの響き也源氏よやへもえきこ
へ後拾遺集よ
たのひ出るまもいとしとそおもふやへらいまこそ我れしかなめと
吐嗟い咄嗟よ同し〜三蒼詁よ咄嗟易度也猶言呼吸之間〜ええう公羊傳
よ子曰噫天喪予注よ噫い咄嗟嘆疏よ咄嗟猶歎息即里語曰咄嗟之間御
前や殿ろと太平記よえええうとやいうよう事也とつり俗語の呼を同し
やうさ　古事記よ八咫をよめり八咫の鏡い人の大指〜中指とをを咫〜
いひ其咫い八寸のをとやうさとつりて八咫とかける史咫八の義よ八寸の
ことつり　〇又八尺とやうさとめり八咫鏡の事也又八尺勾瓊（マガタマ）よいやさうと
よめり神代紀よ坂ともえ少訓を吳よとうさいえうめへ
へやいざ　又とうめり焼歯の条也中臣祓よ焼鎌（ヤキ）万葉集よ焼太刀（ヤキ）とつり是
也　〇直（スク）やき伐亀文（ヒビ）とつひ乱（ヤキ）やきぞ伐縵理（アヤ）とつり呉越春秋よをれ

こ陽の干將よハ文章ゟり陰の莫耶ハ平緩よすを注し顔書よも緩を
無文也ゝらへハ亀文ハ乱燒緩理ハ直燒ゟりまへき淮南子よ黒腸といふ
も乱ま燒歐治子ゟ宝劔よ七星文ゟりゝゝらハ玉燒多へゝといふり
やいそと下云こ倭名鈔よ夥又火田と訓り先燒後耕といふ事よそやく成
のこ畑のやけ山ともゝり今伊吹山の辺ま加り○新撰字鏡よ秡とやき
まけゝらるも云同へ
やいつ下云焼津ゝもり古事記日本武尊の故事よゑ少式よ駿河國益頭
郡燒津神社ゝ名も益頭ともやきつともよむハ誤るへ〳〵すへつともよむハ誤るへ〳〵
万葉集よともやらづべよ家行へゝゝともよめり
やいまそらづめ　太平記よこゆ古事記よ日子國夫玖命ゟ云其、廂人先
忌矢可弾ゟ其建波刀安王雖射不得中於是國夫玖命弾矢者即射建波
迩安王而死故其軍悉破而逃散ゝる廂人ハ軍防令よ何廂兵士ゝらひ
左廂軍監姓名よ所率ゟゑゑて今陣立へゝふ如へ〳〵よそ義解よ
廂ハ方へゝらふ如へ〳〵といふ

〈やうゝ　八日也ゝうハやゝ枕草子よ集よよめるのひやうみなゝゝといふ
やうき　源氏よゝろかくのやうきへみゆめうたゝを朱器ゝらふ白よ
を楊器ゝらふ〳〵入也至徳記よ名〳〵いつゝさゝゑゑて今類聚雑要も同へ〳〵春日小春日ふと注せり又様器寸法と載
て飯坂汁坏大盤小盤筥坏酒盞ふとゝゑゑう
やうやゝ　やゝ久の〳〵なる詞也漸浸稍をよめり神楽歌よもよめり寝と
寝も浸よ同へ〳〵伊勢物語よやうやうとらふも同へ〳〵日本紀よ微もよめり
やうふき　源氏よゑゆ無益の笛又やくきゝとゑゆ今世益の音をよ
つ伊勢物語大和物語よいつゝ是也
やうめい　揚名ハたゞ名だけりとらふ云其官よなりたゝそゝも職掌も
なく得ゝもゝとらふゝいつゝ漢書よ揚名於匈奴ゝとゑゑそゝう揚名介
ゝ源氏よゑゑて新續古今集よ代事よ勉て名の空ゝり揚名稼ハ政
事要略よゑゑ揚名目ハ徒然草よ同書よゝいつゝ揚名書生ハ李部王記よ
又ゑ清慎公記よ揚名廨白ともゑゑう武家よそハ千葉介三浦介上

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

総介等也又准后記ニ揚名家三浦和田鎌倉秩父千葉横山葛西ニ
ゑ菅家遺誡ニ九揚名之官職者取大間職事ニ充其用如攝関将帥之
職者以揚名之名為比與之義といふ○近衛殿ト陽明家ニ
の時近衛殿陽明門の前ニ居るゆゑ也といふ
やうのもの　源氏ニ名物の類物の類同格の物をいふ職人狄合のごとし

△やえ

△やを　神代紀ニ八丘をよめり○著聞集ニやをとらふ蛇といふ長き二丈だ
かりとある神代紀の八岐大蛇（ヲロチ）の事ニよりて八たをにをびるゆゑ也
へ〳〵○八尾城ハ河内国若江郡ニいふ楠正行及正儀ニ据しおきて大坂陣
の時藤堂家の戦場ニも又近江犬上郡ニいふ其城佐々木高氏据らぬ
やをら　源氏物語ニそえそろ弱き意也やをとらと通ずるをろくといふ
よひよひよろよろといふ意也西國又常陸ニやうら尾州近辺ニそく伊
豫ニかしくくといふ
やがの　八日也やうか同し八百日ともふハ別也

やをとめ　八洲女の義古事紀ニハ八稚女ニゑ沙汰の八ハ例の多き故らぬ
辞也又神ニつゐて沙汝といふ延喜式ニ神祇副宣旨ニ八男八女二云と
侍れいやをとめともむすめとも称成へし
△やう　凡て物を形容していふ詞なり
くやうこゝやうゆるやうなぐやうたゞやうふびやうなどやうふびやう
ぶやうなどいへり○家宅の字もよめり
のゝ口語ニいへやうなどの略なり
やかう　族也といふ神代紀ニ属を
うからやうからとよめり○俗語ニやうやうきまりを切くやうまりき事をいふ
幹をきやうしるふ
やうず　倭名抄ニ字をよめり屋數の義也○俗ニ得長寿院の堂そ
差矢射手をといふ矢數の義也後白河院時熊野の益坂源太といふ
者ニより始もろとらふ得長寿院ハ三十三間堂也崇徳院の天承元年ニ
成もう鳥羽上皇創めく平忠盛ニ土木の事を掌らしむれと三十

三間堂ハ蓮花王院也と増鏡拾芥抄ニハ
やうと　殿舎とらふ屋形ともうし水ぐきの岡のやうとうし
さ深やうとうりのやうとうし今ハ屋形文ともいふ〇大神宮御被屋形錦ともいふ
今ハ屋形文ともいふ〇三内口決ニハ内裏の屋形の称ハ古へ大臣の居所をいへ
ど足利家のまより武家の歴々ハ称号ともうすやうとうして大双紙及全浙兵
制ニも其言ハゆへより海人藻芥ニ武家屋形造の様蔵時代蔵城楼死
其法式故ともいへ元ハ古の名家将軍家ニ屋形号ハ許されまた請て許さるゝ人ま
まあり将軍義尹の時対馬嶋の宋義盛ニ屋形号を授けしハ本ハ唐當
時室形号とおなじ鳥帽子直垂或ハ素襖かりぎぬ
せしもの事ハ許されたりともいふされ
ハ代附近ハ武家の私を憚んでいるまや諸士のそひを穿とおもふ故ニ
事ニ名のミありて〇上蝦夷ニて我家
の事ハていにやうとうふ

やがて　俗ニ驚ともあり、粟富記ニ出ともいふ止難（さしがて）の字ニ

あそのまゝ此ともうしくらふ或ハ頓字或ハ乃字を訳ともうすおいちの名也
なり人ニ倚とハやゞて月ハいでよふとハやゝ月ハいでよふとハやゝ
又ハ月のいでようとうふも同事也源氏ニもおとなとハやゝて
空たきふとゝえともあり

やかご　八挺の家檜八挺立ともうふ今八挺小駕ともいふ図昏編
よハ檜脚船ともゝえともうす木集ニ
やうとうけ鳶かくれ行ともうしまた神名ともゝ
やうとを　顕昭説ニ鷹の相経ニ屋像尾町像尾ともゝ二の相あり万葉集
よハ矢形尾ともゝえともうせまた尾ともいふハ狭町の家ある〳〵
〈やきもめ　馬の尾をくゝ成末ともさゝゝてゐて焼く田よくゆるせて鹿をとらふ
ともいふ焼（ヤキ）注（シメ）縄の事也

明日ようハ焼ともあるハ小山田のあるハ焼ともあるハ福を鹿ともゝえ
やきぐち　万葉集ニ焼太刀ともゝえ焼刃作ら成ともいふ也と心ともゝえなどゝ
つゞくおい焼（ヤキ）錬の敏錬ともふ如ゝ焼て又をともうす方也敏ハ利の義ゝ

〈つつみ〉　くぐつる小鞠をへぐそく多よはそろ成らつみ也かど打放
つづけつる小鞠をつくこと也

〈やく　神代紀ょ鳥又焚とよみ常ょ燔焼ふしく成ぬるより〇祝詞紙よや
をかくてうめうとのいう源氏後拾遺ふしく成ぬるより〇平話ょ世話を焼ふしく成ぬるより
くくて往小役ふしてなりとしいう〇小枚褒
そけしきをとらつ也徒然ょ善根をやくくしらつみえそう〇小枚褒
完ょう矢とろくやくくしらつ事のうくへきくそうけ矢しょ兼久
のうくれの附院宣のいう付文ょも武士ハやくくと愛せぬう神う義時胡
往もかくもくとえそえる小約字ょそ契約の事なう〇東武の口語
ょやくくしらつ詞いうかう暮ょやくくしらつ頁んやの数えそぎくしらつへき
栃なきこも

やぐら　樓をよめり弥蔵の義ょ造りなるをしらつふう日本紀ょ
兵庫をよみ和名抄ょ櫓をよめり矢庫ょ箭ょも往庫儲箭とも
日本紀ょえそう〇やぐら墓ょ闕也〇鎌倉の俚語ょ窟(イハヤ)とやぐくしらつ

くそ〇多門矢庫くしらつ小松永氏の和泉の志貴の城ょ始るくしい文多門
天の義ょ〇〇相撲のまよもいう

やぐち　前口朝臣姓氏録ょくしゆ〇武将の狩ょ矢石祭いう晴の附ょ於てや
ょ山神を祭うう成実也矢口飼くしいつ事も東鑑ょえそえて簡祭餅と
もいう〇出雲風土記ょ越八口平賜くえそうハ闇ふくしらつ和くハ
箇の八口ょ〇式大原郡ょ八口神社いう素尊の和魂を祭るといつ
〇矢口渡ょ武蔵國荏原郡ょいう新田義興の行沢良衡ょ欺ふそ死せ
一家也後ふかく悔いう祠を建て新田大明神と号を
やくもぎ　八雲也八重ふのをしらつ古今集の序注ょハ八色の雲気也と
いう〇八雲山ハ出雲大社のうしろよう
やくかえ　台記の中臣寿詞ょ茂世(カシ)ふ木ハ東枝の立栄とえそう盤石栄の
祝称也祝詞ょもいかく八束枝の如くくしゆ説文ょ八別也くえゆ弥(ハ)
木栄(ハエ)暑く轉くしる言也いやょよのいと栄うを林くとえそ
しらつ多木の孫枝の生成る状やごそえ也くしう

やぐさむ　神代紀ニ不平天武紀ニ不和ヲヨメリ弥奥ニ此事ヲ
履仲紀ノ憂病不安ノ事也○中國ノイフヨウナンコクキヲヤグサ
シトヨム

やくだつ　性霊集ニ祈誓弘仁天皇御厄表ニ四十二ノ厄ヲ世
継物語ニ又ソウ四二ノ音ヲ忌成ヘ三十二ノ厄ハ水鏡ニ又ソウ三
ノ音ヲ忌成ヘ今俗男子ハ廿五四十二ノ厄ト云女子ハ十九三十三ノ厄
トイフ〳〵盛衰記ニ宗盛三十三ノ重厄ノ事ミエタリ源氏物語
ニ三十七歳ヲ女子ノ厄年トイヘリ拾芥抄ニ載タル厄年ニ四十
九アリ太一定分ノ厄ニ四十五アリ揮塵録ニ朝名公多厄於六十六韓忠獻
政陽文忠司馬温公王荊公蘇翰林而秦師垣亦然トイヘリ灵枢ニ九年一
忌下上之人大忌常加七歳十六歳二十五歳三十四歳四十三歳五十二歳六
十一歳皆人之大忌不可不自安也感則病行矣矣則憂矣トイヘリ三
十三四十二ハ其前年ヲ取也トイヘルハ又四十二ハ陰数三十三ハ陽数是
其根ヨリ所ノ数ノ年ヲ取テ大厄トスルモノカラン男ハ雙ヲ忌女ハ
隻ヲ忌忌ト云ハ忌ノ字ヲ書ヲ以テ也

やくもさすみち　八雲ノ詠ヲ也素盞嗚尊八ヒラタツノ神詠トヨム三十一文字
ノ定ヲヨソヘテ云ヒヲコシテヨメルヲ云

やくらのつかさ　後拾遺集ニ序ヨリ少八座ハ参議ノ異名也ハ省ノ
トイフハ暗推ノ説也

〈やけ　宅字ヲヨメリヤウニモヨメル少日本紀ニ官字モヨメリ○名目抄
ニ駅家二字ヲヨメリ○仝漸兵制ニ霞ヲ譯セリ今ヲ日ヤケナトヨ
ヘルハ暗推ノ説也

やけふ　焼生ノ義ニヤキテヲヒ生ルヲイフ

やけのつち　駅使ヲヨメリ伊勢鎮坐記ニ見ユ

やごろ　穀ヲヨメリ天比ノ義ニ東鑑ニ見ユ矢ヲトルツヒデラシトイフ

今昔物語ノ前ニ〻ト云テモ之ヲ云ヘリ

やごゝろ　国造本紀ニ八意思金命ト云ヘル是其智慮ノ万事ヲ兼ヌルヲ称ヘテ云ヘリ西土ニテモ智兼人ト云ヘリ八耳ト云ヘルト如シ

やこゑのそら　八声ノ雞也暁ノ雞聲ヲ初鳥中鳥蚤鳥ト云三唱ノ初ヲ云ヘルニ八ツアルヲ云ヘリ顕昭ノ説也

〇やさし　長恨歌傳ニ閑冶トヤウニ書ケリ艶美ニ埃壒扶ト艶優下学集ニ婀娜ヲ婀ノミ常ニ風流トモヨメリ剪燈新話ノ注ニ風聲品流能擅一世謂之風流ト又ヘリ説字ノ心得ヘシ〇恥かしきをもしらぬ情なきを恥流ルヽ人ヲ云ヒ今モ云ヒ恥ヲ恥ヌ方ヲ云ヒ万葉集ニ恥ヲヤシミ又世中ヲヤシ〳〵ト云ヒ又ヤシ〳〵トモ云ヒ又物語源氏物語ナドニ人キヽヤシ〳〵ト云ヘリ古今集ニ

何ヲシテ身ヲツヽシム老ノ入ヲ待ノミニヤハヤサヌ

古事記ニ矢刺ト云ヒ又神武紀ニ弦ヨケヲ射後世ニツヾケ云ヒ是也字由ヲ矢刺而追入ト云ヒ一時興兵矢刺百官人等悉共矢刺ト云ヒ

やさがみ　日本紀ニ痩弱又髪落体痩ヲ訓セリ八雲御抄ニヤセル也

このころ今俗ヤセノヽシラヽゲヽヅケヲ是ニ当ル

やそかより　倭名抄ニ道行成ト云ヒ八道行成ノ八指ノ事カラヽ

やそのそ今ノ世ノ事ヲ云ヒ

出ヨヽヽ

やそうぢ　万葉集ニ宇治ノ八十ノ氏ノヽヽト云ヒ

や集中八沢ノ嘆ト云ヘル長大息ヲ云ヒ

やそ息長川ヲ息ヲ潜息ト云ヒ

やそうぢのなる　神代紀ニ八坂瓊之曲玉ト云ヘリ又弥栄ノ事ヲ云ヒ

や唯ノ長ヽヽト云ヒ又弥栄ノ東遊ノ子ニ山城國

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

愛宕郡の祇園のごとき
神代の八坂の里のごとき和名千家にかくべくもあら
△やー　助語なり古事記万葉集日本紀のごとき
皆海鼈子の和名といひ擲子の音なるべしやーかもしかの擲子油
の音轉ずるべし擲酒ともいひ巴且国は多し菓子なども食をやーか
のひさごともあり殻の割て水のごとくまた酒ごとくなるを擲子盃
といふ西土も擲瓢ともいふ
やーは　八嶋也大八洲をもいふ○竹取物語はおかひつきやーの
へといふに忌火庭火の釜のや室の八尋なるやうに生ずる名なり○八嶋の陵は皇良親
王也和州添上郡藤原の南也讃岐の屋嶋は山田郡よりて安徳帝の行
宮を造らるゝ所也○伊勢鈴鹿郡奥村も八嶋明神ありて神名式よりふ
天一鍬田神社也或は諸尊を祭るといへども
やしろ　神社ともあり家代の義壇を用ゐるなりてあらましき
ほどのふ又出雲風土記も社と屋代とをわかち和名抄信濃埴科郡の郷名

もと屋代あり上古地を掃ひ斎場を設けて神祇祀る其斎場を屋代と
も宮殿ともふるの義信濃國も屋代郷
名あり神代紀の八尋の殿ともよめる又水内郡も神代の地
位の品天神地祇神名神の等差ありて藤信景説も寶亀明主初定諸社大
中小以正三位以上為大社以従四位以上為中社以従五位以下為小社と
いへまた神名帳も大小のごとくて中社ともふことを國史もよくそこ
神位ともに合難し○社字訓せる我邦の神皆土地を占るよう
なれば也といふ○いまゝ宮帳も入を祝の係も免さゞる社を田社と
いふし○本儀式帳もよくそうまゝ春日造ともふ相殿造あり
ともに俗も八棟造といふ皇子造ともいふ也凡て造社の制も
又二間社といふ権現造ありまた堂社造ともふ也凡て造社の制も
寶亀の勅宣もよくへし
やーか　八入をもいふある紅染よいつゝ紅に義入ともふよう也万葉
集も呉藍の八塩の衣又紅の八塩もよく染てともよくへり○一種の木を称

を朝熊かでともいふ伊勢朝熊ヶ嶽
紀集ありて云々○一種大和本草ニ圖を出し
いふものハ今俗やちやびちやくちやびと
かのひちや〳〵といふ物ならんといへり
岐嶋雅談ニ日光吉野熊野
八去ハ山を同し○庭訓の茶器ニ八八盆一對とへり

やしやぶ　養育をよめり弥愚の条ニ新撰字鏡ニ飼ま
ニ又畜をよめり音ちく也○民を
出しやしやひとびと

やしもご　倭名鈔ニ玄孫をよめり曾孫の子也弥頻孫の条ニ五代
の孫と來孫ニ云々來孫之子ヲ為昆孫昆孫ニ昆孫之子ヲ為仍孫仍ハ重也仍
孫之子ヲ為雲孫言転遠如後雲也と
ほるのまれまれやしやしまままそとぬるとなり我世やそん

やしやしごと　なりたちやしやしまんひまとせるとへる是也類書纂

要ニ螟蛉ニ蜾蠃子也とニ云ニ養子養息義兒義息皆同し○養女ハ唐ニ
宗紀ニ見へ養父ハ北史ニ見へ○今ニ子なき者ハ四等以上の親昭穆ニ於
て合へることを養ふまを聴し○なき義解ニ三十以上の者ハ十五已下の者
を養子し○四十ニ及へるものハ廿五歳已下の者を養ふしといふ名例
律の注ニ法ニ違て養子をする者ハ改正をへしむ○戸婚律ニ異姓の男
を養ふ者ハ後一年とへ異姓ニて人ニ子と世ニする者ハ笞五十ニ
又へしと又法曹至要抄ニ雖異姓聽收養即從其姓とへる格別の
子細ある時の事也といふ

やしほをり　日本紀ニハ醞をよめり古事記ニハ鹽折と書酒折宮酒折
ハ八鹽也をりハ日本紀ニ度をよめり幾度も醸しなる酒をいふ也やし
酒をりあり倭名抄ニ酎をつくりかへせるさけとよめり八醞酒の如き我
しふ也といふ○古事記ニハ鹽折の組小刀ともへるとよく練きるひさ
る我しふなへし

〈やをし　安をよめりやすもむよりいづる詞なるへし○易ハ難ニ対する詞

同じ○能因ゝ俗名永愷ありやをとくよめる詩の愷弟を樂易也と注せしよりまろ、

やすむ　休息をとる屋住の義も神代紀ゟ遊息をとりの霊異記ゟ愈とやをきくとよりの○齋宮忌詞ゟ病称須美とゝの儀式帳ゟ慰字をとりたり

やすらふ　万葉集ゟ徘徊猶豫をよめるたぐひ多かれど息むより物を歎てたゞやすらふとよめるも其息むより物思ふ詞なるべし

やすめど　休字ゟ義助辞也をとりたるなるべし

やすまれもやすめ字をとゞめられたるも此時ゟおこりしなるべし

やすらひて　後拾遺集ゟ中関白女将ゟ待りし時をよめるゟ物思ひつゝ待りしつゝもうちまどろみてこそりしつゝとそて女ゟ代てそよめる月のうちまどろみけるをとくやすらひそて待るまに小秋ゟ夜ふくまゝその月をそしるみ今いこしとおりひそてそる心の哀さおのつゝありて帰をこりるべし定家卿の恋の秋ぞと風景をとりしといへるをりしと是也契沖云素性ゟ生明の月を待出つるとよめるゟ此ゟ赤染衛門ゟ大和守赤染時用女匡衡の妻とゝいつり袋草帝ゟ時用依右衛門尉号衛門と栄花物語ゟ此人の作とゝふみひろめたりしと水戸の安萩氏いへり又士逸きくゟ加茂季鷹ゟ説をきくゟ赤染作とゝふ事たしかなるよし古よりいひ伝ふ上臈のそやしの詞ゟ次ての事ゟおぼつかなくなん人ゟ出けきのふへりしことをそそのかしてゟ人ゟもれゟ云伝ふる通りいふと衛門ゟ作るべく後の十巻ゟ後人ゟ出来しなるべしいまゟ目録をとゝのへ同筆なりしを半竟四十巻そこゝ渡せゟ赤染死後の事を右安萩氏のみうけひと出来るものとりの○紫式部日記ゟ丹波守のゟの方ゟ宮殿をとのかりよゟ匡衡衛門ゟそらひ侍りそるをき折ふしのきの事をそそをとりしきりにつきよ侍まそこゝゟ○大江挙周和泉の任そて後病おこりそりそと往吉の陽

かくらんと祈る余ハをしかりてそこともわれん事を歎しき
こゝてゝてくらよ去て彼社よまううとまい其夜の夢に白髪の老翁
此幣をとりとしまう病らえぬというまゝを神とめでゝまゝ
べ有べうぬ状ありう
やをとの　大極殿よりおほとのゝ内安殿外安殿向小殿共よ天武紀よえ
沙西小殿天智紀よえ江次牙抜よ小安殿大極殿後房也とい
やそ〳〵考〳〵　万葉集よ八隅知之と云せり天皇の枕辞よいへ大八洲を知
をしの家也すみ〳〵ま音通せり八隅ハ抱朴子よ従八方とええう一説
よ安見知せうを正義よえ安國とえ〳〵もと義也と
という
△やせごろ　神代紀よ磽地をよめり又毛乃土地ともよ
やせとほそ　痩て骨よ徹る云也新續古今集よ
大京よりゝおほ〳〵よ云をれハ八洲をうしろよのうちよ
△やそ　助辞よいうやうと云とし状ありえ成副字よ

やそせ　八十瀬也八十ありえて数多をいふ天川やそ瀬の波又玲瓏川よ
多〳〵よあり拾遺愚草よ
鈴ノ川八十瀬もやみそうとを君よ代いのう千代の長月
伊勢の例幣使をよめり
やをか　万葉集よ八十梶をよめりやそうかけうぬよもこあり
多〳〵の梶を用ふ私よいう〇八十日をよめり出雲國造神賀詞よえ
ゆ其多きをいふ也八十嶋の如し
やそしま　祝詞よ皇神の敷坐嶋の八十嶋とええう嶋ハ即國也数多を
らよ〇八十嶋祭ハ嘉祥三年よ始る大嘗會の次の年よ行ふ江次牙よ
ふえう難波の湖よ新いて営ふと式よえ摂津西成郡圓神祠今称御
霊古今秘注云堀江東有沢廻一万歩許名八十嶋頭とい今大坂よ属
す袖中抄よ嶋〳〵の神を祭るという〇侍中群要よ海若御祭あり於二
攝津難波海祭一という〇業平の小町うの贈歌を引ハ謬まり千載集よ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

塩うま乳浦ふく風よ雰晴て八十嶋うけて出る月うけ

○参議篁の歌の詞八十嶋かけていへる海上よりへだゝりの嶋あるをいふうけて隠岐なそをうけておもむく万葉集うけと阿波の山うけてこぐ舟とうけ

やそうぢ　古事記よ八十神とよび神代紀よ八十諸神垂仁紀よ八十魂神とあるよ同し舊事紀よ事八十神とせしてへ神の名とせしへ非也

やそくまぢ　神代紀よ八十限とかき古事記よ八十椌手よ作る手へ路と通よ辞道の長手縄手なとくいへり椌へ小雅よ林外謂之椌とあしへ訓せしへ也

やそとものを　八十伴緒の義伴へ百官各相伴なよ部類をいへり緒へ統率なる首領よりふよて舊事紀よ伴頭をともよ古事記よ定賜天下之八十友緒氏姓也とよえともよ

やそうぢひと　八十氏人也八十へ其多きをいふ也とのへふよ属けようあるへ矢ごうけへ也とのへふの夫野乃神山おと同へ物部よ八氏もよきよりて八十氏人といふ也○八十氏川とつけようあるへ宇治川也

古事記よ天下之八十友緒氏姓（カバネ）といつるよ据也万栞集よとのへふのうぢ川ともよめる八略せしへ也

やそのくるし　八十岩栖也播州印南郡よいり岩自ら棲をいふ今天の浮橋とよ播磨國風土記よ賀古郡益氣里有石橋傳云上古之時此橋至天八十人衆上下往來故曰八十橋とよえともよ夫未集よ雷ふまに天の羽衣白み下凡さえにる八十れいとへ〳〵

〳〵やた　八咫をよめるいやたへの略也やたの古事記よ足沙公望私記阿多者手之義也或説よ大拇指と中指と飛張を八咫と〳〵大母指と食指と飛張を七咫と〳〵すとくいへり○農家よやとことらよ焼田の畚やとこがしちと

いへり○やたのへ越前也○伊勢栗名よ矢田いり天武天皇行宮の跡よ今祠を建ようにてこの古名八咫嶺とくらふ○矢田の姓平家物語よ足沙○矢田野へ添下郡矢田の辺おり

やたけ　八雲御抄よ岑也とよえともよ○矢長の義とあり

やうま　古事記よ八田間大室とよえ足沙八咫間の義うて其大を称する也

或ハ八箇間の義ともいふ

やたこ　万葉集ニ足ノ奴の義つたこと同音通也日本紀の欤ヨやいつこと同ジ〳〵いふ

やたがらす　日本紀ニ頭八咫烏をよめり古事記ニハ頭字なし〳〵西土日烏の説のみくよて後名抜ニ文選の陽烏と訓せり○烏を熊野の神使といひ熊野の牛王と称するも数百の烏を印するも頭八咫烏鄉導のゆよきより○大和國ニ八咫烏社ありて土人おとろきて諺ニ呼へりとを宇陀郡鷲家村ニありて慶雲二年九月祭ニ八咫烏社千此云々とあるハ其亜ニ高角神社とあるハ武角身命也釈ニ直ニ武角身命をハ八咫烏といひやたかがみ　神代紀ニハ八咫鏡とかゝえり三種神寶の其一をいふ

やはあの雲にのりて海こと路ニ暗〳〵とたどりつゝ

△やち　八千歳也八弥の義ニて千歳ニ八千歳ニ八千代ニ八千矛ニ八千戈ニ八千草ニ八千鳥ニ八千足ニ八千瀬ニ八千曳ニ八千尋ニ八千蔭ニ八千日ニ八千年ニ八千秋ニ八千束ニ八千穂ニ八千種ニ八千座ニ八千木ニ八千桙ニ八千会ニ八千会ニ八千会

季紋合ヨ
又ワセいふねやつさとなかろりう淀妙の沼よひろあやえ我
○讃岐よやつ〳〵といふ嶋あり人の家のつゝむきく似る故よりふよう
嚴嶋詣記ようえゝう
やつと 八峯ともり多〳〵け峯をいふりやうとれ楮やつとの雅み もよめり
やつこ 神代紀よ奴僕をこめり矚児の条賤称也よて人と罵の詞にもい
ふ古へ男女を通〳〵そよう神代紀よ妻をよみ倭名抄よ婢をよめる是
也自謙の辞ふもよえるり又奴をものやつこ婢をめのやつこともる事日
本紀よえゝう○日語よやつこ〳〵賤しむの辞也蒼頡を訳
せり○日本紀よ奴我やつこ〳〵もらひ臣字僕字をやつこともよめり
○日本後紀續日本後紀あるに臣来なと見えよう必を崩御よ奉誄
の詞よ生ともきいやつこらまれまたにてたる字もえけまい末字ありへ
やつす 伊勢物語よもと名本を字と用るいかゝ或ハ窶ともよめり
字をやつすともらみなるハ首字をよめり神代紀の素盞嗚尊立花奇稲田姫

為湯津爪櫛掃於御髻こいる化字もやつすともよめり新古今集よ
くすもる足折〳〵も人をやつすとれ 遷却崇神祝詞よ横山之如久人物不置所足とよめり八取机物よ
並みてをゝ物よえゝうり略して八物ともよめ古事記よ百取
机代物こいふ如
やつこがた 神代紀よ秋垂穎八握莫然とえゝ祝詞式よ八束穂ともう
新古今集よ
神代よりくみれあるやつこ
内宮の末社よ八束穂の社あり
やつみゝ 神代紀よ八茵耳ともえゝう八ハ天地全体の数耳ハ一身の先んする
ふもの聡明の義よいうまそ後世豊聡八耳の称ハ元享釈書よ八人奏
事一時善聴く解をもハ非也聖徳太子を八耳と称せ〳〵事古事記日本紀
よいえゝと繁疏よえゝう○中臣後よ小牡鹿の八の耳をもり立ともえゆ若
いふみゝく耳敏との也くらひて是春日社よ用る文也くへど古言ハ内えを

国立国会図書館 タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48
ガラス使用

春日まと此辞よくそくんひが来成へ〳〵栄花物語よ八百万神を耳振立ぬいあ〳〵〳〵えゆ

やづれ　僕とよみ神代紀よ吾皇代紀よ賤臣奴又妾遊仙窟よ下官をよめり自謙の辞憔悴枯槁の条也〳〵いつ一説よ奴こ吾をの条こゐより也又奴ざむ也〳〵ともいつ

やつこう　中臣祓よ八針よ取辟〳〵えて菅枕らみやつ孫つの条針とく割ゆる八針〳〵いつ野府記よ襄御帳帷八針糸以結閉ことえう細縫をいふ也〇神宮ハ御案の上よ八針〳〵幣八串にり山槐記よ陰陽師等ぞ奉仕御祓不替八足上小幣只毎度用別割とえう

やつまご　東鑑よ八的〳〵えゆ花扇小刀楊枝を戎八所よ立て徃来騎射もる也〳〵つ又三的之後三〳〵九四六三以下作物等各射ことえう

やつる〳〵　憔悴とゐみ又臞字とゐう痩疲の条也〇神代紀よ檝楫をやつきとゐう敝繞の条也〳〵古今集よ君古のみ苔よや刈るく古里とも

やつさ〳〵　鄙客をゐう檝楫臭きの条成〳〵

やつめさゝ　古事記よ出雲よつ〳〵り八雲立と詣通つり又八芽蔑のまいつことハ藻の名万葉集よ河上の伊都藻の花とえるぞ

やつえおぎき　禁河のもよ八花崎とえゑう八葉鏡ともよ博古図を考るよ漢唐の鑑皆八稜也所謂菱花鏡ぞ〳〵〇宝鏡開始よ圖せる遼津鏡かくのごと〳〵〇古鏡よ圓鏡うへて裡面よ八花形を鑄るとのもいふ也八花形の鏡の圖類聚雑要よもえ〳〵う〇撃劔の手よ八花形いり〇鎌倉建長寺の古鏡ハ方鏡うへて背文ハ菴の形の内よ梅花の枝いりやつ弦のこと　古事記よ八絃琴とえゑう東海の欤重ゐと七つとの八つ弦の琴〳〵この

やつめうぶ〳〵　神代紀よ八目鳴鏑とえゑう倭名鈔よ鳴箭とよ〳〵漢書音義よ鳴鏑如今之鳴箭也とえゑういふ〳〵つと窺ある鏑箭也其窺ハ鳴事のためもんハ鳴鏑よ目ありて今も定る数いるよあ〳〵を為朝の鳴鏑よハ目九つありし事保元物語よえゑ大和法隆寺よ守屋退治の矢もりとて

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

六目の錦ぢり

△やて　丹生津姫記ニ矢手譜右也ト見えたり今めてこといふり

△やど　宿をいふ真名伊勢物語ニ屋門ニ書り万葉集ニ屋戸又屋前ニとも書又屋所の義也屋戸ニてかりめくゝめる八字のごとく屋の戸也

やどか　宿をこゝろがけ詞也やどりハ体よりいふ也旅宿月雪虫等の宿ハ〇星宿の時ハあうの音也

やとせ　八年をいふ万葉集ニ歳の八年を斬髪の我かことを又くるおなじ八年兒の片生の時少放ち髪たくまてふるまひ少童女の八年の比までハ未を斬てふるまひて垂髪をいふ也

やとり　通典ニ取矢者ニ見えたり北山抄ニ賭射の條ニ矢取ニ見ゆ〇大和やとり村ニいふ所ハ文字ハ八鈎ニ書り多武峯より八鈎川の里前ニ流るゝ也

やどりゐ　鎌倉右大臣集ニ見ゆ今くいふ留守居也

やどのそうれ　公卿の家室を簾中といふり伊勢物語ニ簾の中なる人惟高親王の詩ニ相如昔挑文君得莫使簾中子細聽ト定家卿旅衣袖似風やかよふらんとりてらそしやすらん一説ニ遊君の事也ともいふ

やとりのつゝさ　松草紙ニやどりのつゝさの権守ニ見えたり士逸東ニ在し時加茂季鷹甲斐権守ニ任せらるゝを一統よろこべる時ニ歌

きゝまくを次なよろせうやる　梁をよめり屋漁の義本をよせ魚を捕ふの也やるともやるとも年魚の附美濃の苔川のやるやるとも記つく考也〇遠江ニぬだをやるといふ折掛の器ニ入へし

やるかせ　倭名鈔ニ籍をよめり取魚笘也ト注せり梁賛ニ同也

やなぎ　楊柳とも水辺によくさし木するゆへ水辺によくさし木するゆへ又箭の木の義古へ竹木を以て箭とせし故也○和名抄に楊をやなぎ柳をやなぎとよめり○物名抄に又ふるえ少群芳譜に蒲柳○名あり水楊弐うやなぎ　えのころやなぎ　いぬえのころやなぎ　新撰字鏡に楊柳をやなぎとよめり○葉やなぎ　ほそえやなぎ　ほそばやなぎ　ほそやなぎ　こやなぎ　こまやなぎ　こまやなぎ　こやなぎ　こまやなぎ　こやなぎ　こまやなぎ　こ

局也○度會郡は柳の淨くあり豐宮川の上のぞろにあり

やなぐひ　日本紀は靫とよく倭名鈔は箙又胡祿とよみ新撰字鏡は韇と

よみ又箙もよめり當時公々の蒔繪或は螺鈿非參議次將は木地螺鈿也將

束は藍草紫草也矢縫の糸〳〵のぬふくも也一說は矢の笑也上總國は新

笑とよびてあやぐひといふ○壺箙平箙其製大よそまちまちにて

かやのれぐひ後撰集よめる南都正倉院の寶物は壺なる〳〵平箙の木地螺

鈿の行事の日用ふ蒔繪の例幣の行事は用ふる壺箙は譲位節會儀府の公々

以下負せ〳〵る大將は負せ〳〵る又狩胡箙あり桃花菜葉よりも○大神宮儀

式帳は黒葛似の胡録とえり古畫は源頼義の腰はさしたるかり竹をりく

るの也古製とれり〳〵ふ平胡箙は典雅なるにより竹をりく造る桃竹とりく

結ひそのゆひめは蜻蛉の形をなせり今は胡箙は蜻蛉とふがごとく竹筒也蜻蛉

い勝出武を取るといふ禮の司馬の下は注は籠は竹箙矢と盛の器也とええ童

蒙頌韵は蘭をよみ真名伊勢物語は箭筒とよめり廣韵は箙箭室とも

やなぐひ　今世物居る器よりふる古への結び案〳〵源氏ともええり柳の

細枝を紙よりこて結ひ合せて机ふ〳〵脚とは其細枝と七八本も結ふ後

也三角の白木をたてゝ脚は平板よせ〳〵是也一說は柳筥の益の變せし物か

ともいふ明月記元久二年元服の條は先冠置柳葉益置座右次泔坏置居

筆置柳葉座とええるはい柳箱と同物あるや一說は神宝の中は柳盤の

ごとし也柳箱とは別ありともいふ徒然草よりふやなぎとは柳条のまゝ

とええり

やなぎごと　柳箱ともり元正記はええあり寸法の事は延喜式西宮記北山抄

なとにくはしく蓋も底もありて本と編て造るとの也下学集は編柳

枝作とええり一尺四方とええるり王陶談淵は床頭有柳箱可大餘とも見えたり

よ今人取其細條火逼令柔屈作箱篋とくはしくいふい今柳行李ふ〳〵訓意通ふり黏著ぬ事也新撰字鏡

〈やなぎ　松脂梅膠桃脳の類をとりふ埴ふ〳〵訓意通ふり黏著ぬ事也新撰字鏡

よい滿をふのやふとよめりきせるの脂とも大坂よりおこせる

やよい　日本紀のすゝみも家庭の義也ふそまぢ百千足といふ一都會の

体也庭ふ園とふふ其義万葉集よえる〇今俗急遽を謂て失場とふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

保元物語よ久え廣冨記よ矢庭くもろ

△やぬ〜　通鑑節要よ屋主の字久えるもと

△や称　万葉集よ屋根ともろ神代紀よ兒屋根命にりやゝ孫の義重なるもと
らよ也称いふ人てら人詞ゆへ〜よて古事記よ屋一字もよめり又賀茂季鷹
い屋峯なるへ〜といつ

△やの　万葉集よ妻こもり矢野の神山とよみ〜ハ伊勢度相郡田丸の坤方四宮
寺の西よりり宗祇説よハ伊豫宇和嶋よ立こ八野ハ出雲國神門郡ともに
つ〜く社とにるまゝ神山〜らふるへ〜

△やハ　古今集よ人の心よあかるとやゝせぬしのる也伊勢物語よそらら人の
ゑやゝとおくれ称ら人やゝせぬ我やゝおよまだよふしある先よ人のにゝうめ
やゝ〜らふも同〜源氏よ刃称ら〜ふやゝおし〜そぬこゝろう朗詠集よ
ゝにりれやゝそ〜勢〜まこゝにりれやゝもるあかれよハのをもれすひやゝお
よゝ却てる也よて又物とうちかへ〜そらふとるうといつふやゝとかうらひ

てやゝといつるよ同〜又語の詞なるゝりうえてのこやゝ人よかゝこん花ゝ之俗〜
や根ゝ人かゝとめやの義也又ゝを体め字よきゝ手ゆりもやゝちゝ〜人なへてや
ハ男ひありゝもいふ、せん也やゝうた杜やゝるの義也といつ意を書よるし
もり助語なれハ盍ハ何不也と住せゝりう如〜〇尾張の口語よやゝとふゝハ東
武のやゝ〜ゝ如〜やゝと員人やの類也

やく〜　神代紀よ氛をうめり柔弱の義なへ〜よりて通を〇延喜式よ
和をよみて古語也といつ万葉集同〜

やもり　爭（イカヂ）うの義なりといつ

やゝゝ　聖武紀よ宇佐郡よ坐廣幡の八幡大神ともハハ大ハ例の義幡ハ三
韓降伏の軍功をりて称ゝる成〜〜延喜式ふもハ幡大菩薩宇佐宮とゝえ
るり世の大隅國よ於て八流の幡を降（フラ）して顕ゝ坐ゝもいつ曼鹿兒嶋の
神社よて一宮記よ正八幡宮と号ゝるよ〜ゝ失〜出見尊を祀ゝるよいつ正ハ
八正道のをゝをゝるり菩薩の号よ据もるへ〜ハ正道ハ持世經智度論
等よ見えるり〇男山の供僧毎年六月花頭（チバナ）よて大會式あり作地（チバヘギ）盤

くて盤上に剪彩花と造る事九十九品内大盤三飾小盤十六飾屋
体人形等皆古へより其定ありてすべて是式神前に供し一旦一
山に饗をる人此頭人を勤て後衆徒の負に入事也又熱田に四月八日
花頭とて其年の頭人盤上の献物及神人の饗を営りて座位を昇者似
たる事也○由比の八幡宮に流鏑馬の建立也鶴岡の八幡宮に頼朝の尊
崇とる所にて鎌倉にあり埴生八幡宮に義仲の願谷と納めし所
越中にあり平岡八幡宮に葛野郡梅畑村にあり東都完に八幡に僧形立像
にて錫杖を持たまへり市谷稲岡八幡に甲冑の体也牛込若宮八幡に束帯
乗馬の形市谷尾張屋鋪の八幡宮に僧形にて地蔵に似たり京東寺
の八幡に僧形のに寺記に弘仁丹後に謝郡枚列神社に三女神の体有
て後に素尊の像あり昔枚並山に今男山にまもれり是て正八幡宮
にやへきを○琉球國にも八幡宮あり供八幡菩薩即太士也と
中山傳臣錄にみえたり○やりくのえぶくと宮あらくはそく
夕人のかぶるに貫之集にみえたり其初め石清水寺の鎮守にて徴か

にもとりて延喜式にも載たり加へて是は男山の八幡をそこにうつせる也
山崎の八幡に行教宇佐より勧請の時まづ着し地なる故にて宇佐に
對して離宮とこゝに八幡宮の築給より京に向ひたまふの始にて東大寺
鎮守の八幡宮也其事委く續紀にみゆ○勝寶元年十二月戊寅迎八幡
神於平群郡於宮南梨原宮造新殿以為神宮丁亥奉大神一品比咩神
二品と是神位の始なり

△やひろ　八尋殿に神代紀にみえ比良木の八尋矛に續日本紀にみえ
やしろで　神樂歌にも梁塵秘抄にも八枚の平手也相撲にて剌て神
供と盛ものにもこゝに神祇紀に作葉盤八枚盛食饗之とみゆ新勅撰
集に

霜枯や桐のひろ葉も八枚まで

西域の俗にもかくまでいふ南海寄歸傳に並多縫葉為盤寛如半席
とみえたり○延喜式に拍手四度に別に八遍注に神語所謂八開手是也と又
えそうやひ〳〵でぶうち天のをしでとうちをうつるとみえ是也八遍つ四度なれ

八合せて一人の拍子の数三十二也そこで八度手のくうて調長豊吉國家
幸甚ぞと唱うは古義よりあることと

△やふ　新撰字鏡倭名抄よ藪をとりあり孫生の条ゐへ日本紀のそよや
ぶらうもいう仙覚説よやぶは水つきてこうもぐるをとらふ俗
よやりくいふくいうやぶしうゐぬやぶかうれぬとこのしは休の字也
古今よ

日の光やぶしわくもいいそのようう星もむさしよけて

説文よ藪は大澤也と注せり俗よ竹やぶのことは仏経よ藪也と
ゑゑうう○倭名抄よ大荊を和名やぶらともあり荊は茨通う藪をもて
ろともあることも○子を棄る藪にうもとを拾う藪ぞしとらふ諺は
金葉集よ

ゐよまうでゐおおかりみくうなやんうぬくなりぬる

やふま　大嘗祭祝詞よ屋船命又ゑゑうう太田命傳の注よ瑞舎号屋船と
又ゑうう又屋船久しく遥命屋船豊宇気姫命とゐゆ謂造宮之材與茨殿稲藁也
一説よ屋船久しく能遥命屋船豊宇気姫命とくいへる弥生根の義也とゐ
と○万葉集よ八船とゐる見安注よやまたきは多くの舟とひくも也○吉
竹集よ矢舟とゑえてくも舟と注せり

やぶる　神代紀よ害又傷又破をよめり矢觸のそうや○又戮とよむ弾と同
やぶさう　吝又吝をよめう破離のそ如へし吝番ふれは事破ると雑也

○新撰字鏡よ嫪をやぶさしくようよめう矢伏射馬のそ如へし射馬とふふまも
やぶさめ　東鑑よ流鏑馬をよめりて式うて天武天皇の時のうまのみそ
東鑑よゑえうう是は神前よて執行りくて式うて天武天皇の時のうまのみそ
始まりという○五月六日尾張國府の社よ流鏑馬の神事うう神人馬よ乗
て桃弓棘弓をそ弦すす梅花無盡蔵よ載たるは古きまも也という古事記
やふのたびがき　日本紀のそよゆ私記よは八科よ垣を結也という古事記
よもたびがきやぶしまりくゑえうう八節の
ゐをかうや

△やへ　古事記日本紀よゆ八重也やへ垣やへむぐらやへさかきやへぐうやへ

かをみやへくもやへのくまちやへのちかがをかといふ皆叢重かさなる言なるべし○弥への条也西土の花よ重葉といふ八重咲也○琉球の南よ八重山嶋といふ中山傳信錄よえゆ○千葉ハ西土の称也○阿波鳴門の辺よは潮満ることやへさらさらやへさかき　儀式帳よ天八重榊とある三の条居の左右よ榊を編て附ことの也枝数編様の事も帳よ詳也又心御柱記よ以八重榊奉飾ことえゆ後鳥羽院御製

神風や八重の榊をかきてもみもさだめし川の末そろけき

やへたゞく　神代紀よ八重席薦ことえゆ幾重も安といふ兵範記よ八重畳一枚長八尺弘四尺延一枚薦七枚重差也○今の畳の仕法も八重畳の数よ象ちて本式ハ八重也ことふ神今食神態之時布神座八重畳也

やへくのひと　袋草紙の歌よえとふ昆弟を指てらふ同ゆをれまほのまよやへ咲ふるしふ如く成へし

△やや　弥帆の条帆の重ふる義いてふて本帆や帆ふるくふる○神名式播磨赤穂郡八保神社三代實錄よ八穂神よ似ふ

やかう　萬葉集よ八百日行濱とえふ古事

やかよ　祝詞よ八百丹杵築宮ことえふ丹の下吉の字脱ふる古事記よやかよかいきつくのみやことえふ八百丹ハ枕詞也八百ハ多きをふみ也よ土の古語いふ發語也

やかあひ　源氏物語の歌よ

海よ坐神のことみよからハ八百益の八百日行濱公卿勅使よ土御門内府掌相よて立ふる五十鈴川の条よてくよある西行法師

世中をそふみかけの内よるせあふ京にのみてやあひの神

天御蔭八百會ふに中臣祓の辞也やか合の神ハ祓所の神とふ加へし又八百會の拜所とそいふ

やかよろづのかみ　中臣祓辞よみゆ八百萬神とふ日本紀よ八十請神ともえゆ万葉集よ久堅の天の川ふよ八百万千万神ともえふ○やかよろ

づくと同義也

〈やま　山とらふ止の義動うごく状なり古今集よもひ〳〵の山状かくし〳〵てかくてのごとく我なりひらのやごとくあり一説よ弥間の義隔へだてるとらふるうつ間隔へだてるとらふるうつ〇山陵をも山〳〵らふ神祇式よ到山作所とらふ三代實録よ山作司もえゆ神代紀よも斬作喪屋此即落而為山とえゑう涼氏よも陵墓をさしてみ〳〵らふ〇塁積うつてみ〳〵るうつ〳〵らふ諺よ古今集の歌よるき山も麓のちりひちよりなるごとくえゑる説苑よ積成山とえゑうやまと　日本大和とよむよ義訓也山跡の義しらう古旧き説也〳〵多く処ところとらふ式よ出る名うつて後国号〳〵うつ〳〵ふ大和（おほやまと）

〈一ゐよ國魂の神もますごとくまします也げふも大和国形吉野一郡三分の一よ居て山の〳〵国よえゑう神武天皇東征まし〳〵てうつ代〳〵めてたき皇都ありう〳〵ふ大八洲の内よ豊秋津洲も大日本とよ標し後ハ六十餘州よ併ての總号とふるうふ〳〵郭山墓野馬墓なごとるハ西土の私也大和大

納言秀長秀吉公の弟也〇東西とやまとうつかぢとうつひよ学令よ東西史部義解よ謂居在皇城左右故曰東西也前代以来奕世継業或為史官或博士因以賜姓惣謂之史也とえゑ東文忌寸部ハ大和國よ居西文忌寸部ハ河内国よ居とりて皇城よりさして東西と義訓せ〳〵也とらふ又倭文直ハ阿直岐う末也河内文首ハ王仁う末也共よ天武天皇の時よ忌寸姓を賜ふう〇千よ大和嶋大和嶋根なとよめる豊秋津洲とらふ別よ一嶋をよあ〳〵を淡路の一島よ大和あうま末集よ

大和川探〳〵れて流きあ初瀬の方よあ〳〵ふ〳〵ら〳〵

式同郡倭恩智神社古事記よ天津日子根命倭奄智造等之祖也とえゆやまべ　山部をよあり山と司ふる部形也山辺の山の辺ハ郡のごとくいつもの加〳〵ふう山の方の義也式山辺郡山邊御縣坐神社西井戸堂村うあう舊事紀よ建麻利尼命山邊縣主等祖とえゆ山部宿祢赤人と万葉集よえゑる代古今集の真名序よ山辺赤人とかゝ〳〵ハ誤也とらふ〇

古事記ニ定賜海部山部山守部伊勢部ト又伊勢河曲郡ニ海部川部ノ
名倭名抄ニ又ヘラ伏郡山邊村ヲシテ百衆集ニ山邊御井ヲラヅモ什
所ルヲヽラニ説ヲリ信濃ニモ此名ヨリ山家ヽ云テヤマビトヨメルヘ山部
ノ系ヨリヤ氏姓ヲソヤンベヽモ唱ヘヲリ○山部トヤマトノヽ唱ヘルヘ正暦ノ
御諱ヲ避ルヲリヽヽ二聖記ニ赤人ハ伊賀ノ山邊ノ人ヨリヽヽ又ヘ
ヨリ伊賀ハ伊勢ノ謬ヨリ〳〵今河曲郡山邊村ニ赤人ノ屋敷跡ト伝ルアリ
伊賀一國ニハ山辺ト称ヲル村ナシヽヽヲヽ山部モ山ヲモ同義ナルヘキ
ニヤ倭名抄ニ度會郡田部ヲヽノベヽヨメルアリ日本紀ニハタベトヨミヲヨビ
モ又證トスヘシ○松前ヨヤマビトラフ東ヲリエヲヨマラメフヽラフ
ヤマヒ　倭名鈔ニ疾病ヲラフ止ノ系也トラフ齋宮忌詞ニモ病ヲヤマヒ
ムトラフヘヲリ續後拾遺集ニヤマヒヲリヽヽモヘヲ今モ
西備ニヤマフヽモラフヨマヒヌミヨフ又ムセ後撰集ニ足ビキヌヤマヒヲヘ
モトヨメリ
ヤマノミ　山藍トモ山井トヽラフ也拾遺集ニ系ノ使ヨ在ヲリ人ノヽヽヨ

ヨ摺ヽ加ヽヲリヨヨヨヨヨヨ付ル伝遥ヽヽセヲヽヽヽヽ
かきろふくそこをヽヽヽヽ

用ねさらさゝその見也藍なと似て葉よ綿文のうす賀茂よみ〻しの紀
別よりも出せり本草原始の透骨草也といつ
やまあひ　山間をらふ也夏るのすゐるとにあり
やまのそ　つゆよ山路とかけり万葉集よ山際〻もえんう〇伊勢物語
よ山未よりていまそとを行ふれん土佐日記よ今夜の月い海よ入こと
とうて業平の君の山のえもけてらまをもあふかんとらふすゐんおや
ゆるゝ〻海辺そようまゝ〻しるや波立寄て入をとりかんとよまてま
〻や六帖よ友則
入月を山のこうみて入をとゝもく人のみ恋いうゝものまん
やまがつ　山賤とかり山縣のふとらふをつゐあづまろのつけて
やまびと　山里の人とりひ又仙をもらつやまうゝ〻もろも〇仏書よ仙
とらふ翻訳人仙の名と借て訳せり胎蔵曼陀羅の中よ婆藪仙瞿曇
仙就仙の類多〻天部の中形と行よ依て呼者一二よ祝を道士の所謂とい
矣うんと其趣い近〻〇津軽山中ゝくらふい山丈のまゝ也〇源氏よ山人の

あゝきこのゝとらふい李文君う却老方よて事文類聚よゝえゝうう文選笙
賦よを東下鬱〻朱実離〻ゝとゝえゝう〇仏邦よそらふい生馬の仙久米
仙大伴仙安曇仙い元亨釈書よゝえ又柘枝仙女万葉集よゝえ
やまたづ　古事記よ此云山多豆者是今造木者也ゝえゝう俗名敏よ
らふ鏘也万葉集よもよめり近〻ゝてまい向ひよ振あけて撃とらふ
くとらふ如〻ゝともいう但秘か能の話ともいう
やまびこ　昔家万葉よ山彦とえゆるゝ山霊とらふ也新撰字鏡よ蜮と
よめるい云ゆるゝ〇万葉集よ山響とよめり山ひこいふぐきの意訓也或
い船とよめり谷中響と注せり俗よてゝ谷ひこといつ新六帖よ
世中よせもしき谷のゝくゝ成いたをみびこえみけるゝ
〇新撰字鏡よ龍膽をふびこよめり
やまかは　山と川とをいへるあり家集よ山川をよりて奉へよとらふ類
是也山より流をいふをふびこといつ清濁ありて今てうう孝徳紀よ耶

麻鵐波よをし二のおてとよろ類也山川よ孤のみうえこのうことよ
ねうと同し古今集よ志賀の山越うそよえそ
やまうく　古事記の歌よやまうくとみまきしいうまことらつら山方うえし
本朝式よ山形とそう的の後へよ紺布よ張也とふう周礼の皮也辛よ梓
弓よの山へうくはくるつ山形よりせう童蒙頌韵よ猴とよあう○所
の名姓氏うとよ山縣をよめう古事記の歌よようあつ唯山のおうくと也
やまのかみ　山井也貫そう結ふのそづくよ湾ととまるつ近江也采女うはうさ
山かけうえそうとうめつ陸奥也又相州もはう○山井大納言ハ藤原道
隆の子道頼ヶ也○兼和中藤原朝臣綱継年八十五山井里第よ關可
すとうつ東山霊山の地也
やまゐ　山眉のまゆかのうかうを眉墨よそそうる也とふ
うとを山眉ふうとよいつう玉京記よ卓文君眉不如黛墾如遠山をいよ
起ふう詞ふえへ○山蠶ハ蠾(ミマワリ)也延喜式よ蠾糸二十約とえそう又
後漢書よ野蠶成繭とえそうつ予一の木化右よ其右よ洞

穴にうて糸を纏ひ山蛮の如くうそ野蚕の如き住るあうう此誓神
やまぐち　五色線ふうとうふ右中金蚕ふうよや○山眉絹ハ黄絲絹也
山口とそう西土のおうよ山の入口也○祈年祭祝詞よ山
口坐皇神等の前よ白く飛鳥石寸忍坂長谷亀火耳亀と御名ハ白てえ
えゆ飛鳥献火ハ高市郡也石寸忍坂長谷ハ城上郡也皆山
口神社とえゆ山邊郡都祁山口神社ふ○山口まつるハ私人私人ふとの
ふる事也伊勢造宮うも山口祭祈うう○山口ふるとうふ私人のおを得る
狩人の獣と求うも山口ようあうとうて甚始うまのえゆうとよいう
兒童ふく成人の後器量あうえまを窺うとうもよめうとふう○成妙
よいえ山口ハ大内氏多ハ良姓也武備志うも安藝石見之西為山口谷国郎古之
周防州也とえそう是也享保廿年の秋負作郡山口村よて権師怪異の
物よ逢うう話ふ
やまづと　万葉集源氏物語ふるとえそう山里の苞苴のふ也
やまざくら　真名伊勢物語よ山家とよめう○賈島う詩よ雑有紫門

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

長下関片雲孤木律身閉猶嫌住久人知處見擬移家更上山新古今集ノ

山里ハとひくる人のてくさにやかひ住居とそくさやまきりれ

西行法師

志のふくさ又てかくのみもかれぬるかねをいかてつゝまん

源氏ノ松のくさ紙をとりて野ぶし野ぶしとくく修行をする傳とかや

卧ると同しくさを名目とらんみだふとこゆ山伏の装束也今修験家一流の称とあり後撰集ノ素性法師

みやこ出て千歳と経てもとへかしみよしのゝ山の秋の夜の月

やまとうた

日本紀也万葉集古今集序伊勢物語ノ見注世ノ

ことの葉歌と称する言の本也定家々

秋ふたあふ夜のことの色かなるこゝろ

ことと對しいつまでの系ノ集古今ノ

訓まそたらぬへき代やまとうたの其正聲とそらるへし東

歌ノことに名し〳〵者〳〵きうや所謂秋ふたあふ夜のことの色かなるこゝろ言詞のよろしきを評して色かなるこゝろと云ふ也

みそひともしかのつの文字あまり万葉集ノ和歌ことに此ノ如し

やまとうた

大和者也神宮三祭礼ノ今ト有事也大神宮式ノ

笛を吹琴をかく事もこそうまけれ

神なみとゝ川のち〳〵浪ノ

やまかづら

古今集採物カテノ

木綿結冠額ノくらひ万葉集ノ見ひきのかづらもこゝろ

かげ日蔭ノ糸ノ事ノ従ノ正木のかづらそ繋ノ結ノ

を山高ふしてふ古事記ノ神ノ

かけるかもかづらもこゝろ教長ノ説ノ神楽ノ歌ノ

焼諸社ノ主殿寮ノ

を頭ノ後へ引ゆるすこと

と綺語抄ノ曙ノ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

やまのうひ　倭名抄に峽とよそうかひあひと通ふ山間狹處と注せり古語拾遺に大峽小峽とえり

やまろそ　日本紀に山椒をえりあり文選注に山頂曰椒とええそう中臣祓詞に高山末短山末とえり式に山末神社もええそう

やまとよみ　袋草紙に倭訓の事也倭訓の海東諸國記みもえり百濟の王仁より始ふ王辰兩度に定ふとえり非也是神代よりの語をとて訓とせり年次せり

やまごとり　比慶の山ゐとに禁足して籠ふ居ふをいつり後撰集に十二年のふごりふそるんえもふきええさうつる拔きまよおやつのゐふそふの十二年のふごりふの法師のめおやりとええそう○山丈ともいつりええそう

やまとごと　延喜式に和琴ふええ万葉集に梧桐日本琴とええそう明月記に和琴ふ長六尺鉄尺頭弘七寸方寺五分ふ足ふ和名抄に日本琴ふ俗体似箏短小有六絃俗用和琴ふええ隷体似箏ふ二字ふええ隷武年中行事に和琴ふ六絃ふええ少長明ふ無名抄に古へふ六張とかふりそ改ふふとのてくまんそうふええ

やまとうき　魏志に倭錦とええ韻府續編に漢武帝時日本貢麒麟錦義楚六帖に大倭國貢神錦杜陽雜編に女王國有明霞錦又有鯨油錦ふええそう○伊勢遷宮に用ゐふせふまゐ倭錦の文屋形小車鶺鴒小葵牡丹蘆荷纈纐呉錦ふとええもり

やまとごころ　日本心也赤染衛門のやまとにも侍ふえゐ博士に對いつり

やまとたま○　日本嶋根也天皇の御名に日本根子といつる多きふ如し御讓位ふふの宣命に現神止大八洲國所知須倭根子天皇ふいつる通稱也

やまさそど　万葉集にえゐ山榛戸ふいつり又楊の板戸のふまゐ顕昭ハ杉の戸ふとええ山居ふ体也とふふ杉の戸ふとええ松の戸ふとええ如ふいつりて万ふふ杉ふ板戸ふふ後世ふふりそれ殖物ふふふてよめふ事もいつり也

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

やまもゝくかぜ　山下風也吉野よりみゆる山おろしの風と
ふよ同し
やまぢ加けち　源氏ゆえゆ倭名抄に殘道代にあり山路闇道也と注せり
やまたちそふ　延喜式大嘗祭の條よ山橘子とゝえそう俗よ藪柑子とらよ是
也と古今栄雅抄よゝえてゐけよ
集よまるる沈清火納云ふ本くせり新六帖よ
ふりよける初月代りの髪をいひやりたちそふのいろもかくる
やまうくだまくひ　日本紀也源氏物語よ初出ゝえとかゝりてゝとやまとなま
ひの世よ用ゐらるゝ事もつよりあとゝえそう「俗禅閤の説よ日本の目
ふしくしくふ云るうゝを
〈やみ　闇夜といふ止の字加一やみのよくもいふ〇枕よゝそれ闇いと
らの闇かとゝあるかたよくなる詞也日葉よ萬事付之一笑前程事暗如漆とも
ゝ俗諺よ一寸さきはやみの夜ともいふ
やみのうつゝ　闇に文うくしくいふるれ暗き事をのびてかうゝあるよゝを

らふれ
〈あべのやみのくにかうゝあるよふいろもゝきうゝ
〈やむ　止又病をゝあう同系加一日も止も同し孟子よ以ゝをうむもこよ
同し霊異記よ寝も轂もゝあう
やむと　倭名鈔よ鰥ゝとうう鰥ゝ然ゝてらるれ魚の目の恒よ閉き
るゞ如しゝとゝえう已男の系也やとゝもいふ〇今よ六十以上而无
妻爲鰥といふる孟子よ老而無妻曰鰥とあるよかるゝれゝ出よ有鰥
在下曰虞舜ゝとろいまゝ老男の妻なきを称せうれ倭漢ともゝよゝて
いふるれもゝよ霊異記よ鰥ゝそのてやもゝとゝあう
やむめ　倭名抄よ寡をゝあり已女の系孀も同し俗よやもめともやまめ
ゝもいふ〇伊勢物語よ男ともやもめそめそとう小圖雅よ凡無妻無
夫通謂之寡ゝとゝえり
やんごとなき　无止事ゝ系也人よらよい真名伊勢物語よ貴人とやんごとな
れるゝまゝもゝ詞よいふかうゝ引ゝいふんの如しいと

及や也○本ことやむとゆめことといつろい後撰集後拾遺集の本ごう
ろえこう

△やあ　夫目のごく集などよりてつくよめともいつう

△やも　結句の助語にてつくの方集まえこうもの体字也○日本紀
よ八維とこうろ八面の事也八方も同じ

やのめかくす　遊仙窟よ病鳥とこうあり支木集よ
くかくかりめかくをもりかくきい独めう萩のおうつきの末

△や　稍漸較旋差微良寝あとこうよう
也うんど秘もやこうむはい小也と注やう寝いりと漫也漸と同じくく
くこうろ狩せり○源氏よやくとのごとまろうんたるとこうろ石の詞也○意
師の俗よ生児と称せう伊勢の南方こうあり後漢書の注よ良褫甚也とこうえ又
やくひさく　日本紀よ良久とやひさくにくきやこうあり
是ヤ日頭久ヤといつるとも亜要記よ良久とやひさくにくきやこうあり
やくとせい　源氏及和泉式部う秋よこうあり歎字報字あくとやくとう

△やよ　呼かくる詞也やよやそやよやいんやうんやよやいんとくれやよいと讀
む

やよひ　三月とうる弥生のごくとれいこう通を春に月と生河氷更来弥生と
吹すしるあるつく○やよひ山上こ大石ありて八色分明也村名
やよひれど　古今集の長谷ちよこうゆ基俊説よ弥をいやの事とうんとくく
たくあきをよこうへく

やよろひろう　仏ロ云右の肘よこうゆ観物三昧経よ仏足下千輪相中出二
大光明一足跌毛孔中有二八萬四千一蓮花一こうゆ

△やら　疑詞よういろくの如く

やらやらく　やらくくといつ○又やらんの略也

やらふ　日本紀の逐とよめるも又逐降をやらひやりてよめり靈異記は攘もよみ○神逐と神代紀はよめども逐ふ也

やらひ　行馬といつて逐ふ為闌入の者を驅逐とりて名ゝと

〳〵やり　全浙兵制は鎗と譯し戈鎗とも名ゝる也俗は鑓と云訓よりて造る字也直鎗十文字鍵鎗管鎗鎌鎗ホの品ゐく太平記住吉の合戦は阿間了頴といふ者鎗をとりて敵と多く突伏そうと又えて應仁文明の比よりとり用ふることえそうりく手矛よりも出る物也今は手鎗と称する物も〇本朝軍器考は足利殿の代のまよなひて我國の軍制やまと改りて東國にて騎戦もあり又組打て世に歩戦と用ひそれ元軍功と論ずる鎗ゐの一事と定る事よしかし弓矢寸物と雖も槍の藝中々王也といひて其賞格を定る事実なるも槍の藝もせよ似ることきを以て其代物軍國の要器となりて古ろ

儀式などらひしおのこゝ其人ゝの品位よりてけぢめと執しめて其威儀こせ〳〵まぎはめるこゝいつて今代名ゝへ〇吉やこと訓せ〳〵木の両頭鉞者ことえて槍也槍の如くみて又を施せ〳〵をりて鎗こそ槍鎗りやと同物なり鎗ハ異朝より新制のものゝきこえき〇もづが樹の七本鎗ゝといふを豊太閤栄田しの合戦の時也近江の国也〇国初の辞ゝ曰當の遠よりて成鎗ゝ曲ゐこいつり〇やぶるとやりてといつる事伊勢物語よえ〇日本紀ゝ弊字とよめりやりど　遣戸こもり徒無ゐよやり戸ゝ立部の間よりも明しこいつり禁祕枚ゝ高遣戸ゝえ新六帖よりかへやり戸ゝともよめり是く日本の制也中山傳信錄ゝ琉球門窓皆無戸框上下限皆刻雙溝道設門窩其中

左右推移以高磨閉（ガタテ）てえそう

〳〵やぶ　遣戸よりも矢の速よるるよう詞ゐやくとやう思ひやるかくいつり思ひとやるるこゝ思ひをそこゝ以也〇日本紀ゝ改字弊字ゐるこゝ以もろやるゝ同一

837
34
48

△やと　△やろ
△やぬ　△やゑ
△やれも　日本紀に八方ともあり八面の義也
△やたて　矢盾也人を庇ふ物の具なり竹を編て
その上を漆ぬり流鏑馬などに用ひ笠掛などに
も立つらひ四半九半なども是を用ひ的の
ふちにも付つらひ射向の袖と云ふ物も是
なり

△やこ

倭訓栞前編三十四終

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用